大本山永平寺　高祖道元禅師七百五十回大遠忌参拝記念
盛岩寺本山参拝団　　平成14年10月12日

唐丹文芸

唐丹短歌会

「さちぐさ」詠草

友逝きてひと年春はめぐり来し心はいまだ喪の明けきれず　大津秀子

愛従兄母知らずして育ちたる君は逝きませ豪雪の中

又一ッ年老いしかと思いせば目出度き正月心細くも　板乗ときわ

カサカサと風に追われし枯落葉吾れの歩間をくぐり抜けたり

幾人(いくたり)の歌友(とも)また親友(とも)の逝き給う死すは悲しく生きるもかなし　上野ウタ子

風花のひとしきり舞い冴え返る黄泉路の旅を歩むか親友は

通院に疲れたる身に粉雪が子の昇りたる天より降りぬ　環あき

引縄の測量起点に碑の建ちて伊能忠敬顕彰されし

手をふれなば綿毛のごとくすべすべと柳の芽ぶき風にそよげり　川原セイ

牙をむき白波ほえて幾千人の命のみこみし三月の海

（昭和の津波七十年に）

亡母(はは)顕ちて吾を手招きせし夢に目覚めてみれば猫重く乗る　須貝美佐子

猫と吾の写真のりたる新聞を子等に送れば遺影によしと

いま一度逢ひたき人の訃を知りぬ逝きて六年過ぎたる秋に　高橋昌子

この世には在らざる人と知りし時わが胸ぬちを風の吹きすぐ